



北京市高等教育精品教材立项项目

張清本
坂口安吾

子規
川龍之介

叶山嘉樹

谷崎潤一郎
謝野晶子

日本近現代文學選讀

王志松 林濤 編著

夏目漱石

津島佑子

川端康成
宮沢賢治

島崎藤村

志賀直哉

村上春樹
中島敦

外語教學與研究出版社



北京市高等教育精品教材立项项目

日本近现代文学选读

王志松 林涛 编著



外语教学与研究出版社
北京

图书在版编目(CIP)数据

日本近现代文学选读 / 王志松, 林涛编著. — 北京: 外语教学与研究出版社, 2009.3
ISBN 978-7-5600-8271-4

I. 日… II. ①王… ②林… III. ①日语—阅读教学—高等学校—教材 ②文学—作品综合集—日本—近代 ③文学—作品综合集—日本—现代 IV. H369.4: I

中国版本图书馆 CIP 数据核字 (2009) 第 040816 号

出版人: 于春迟

责任编辑: 刘宜欣

装帧设计: 孙莉明

出版发行: 外语教学与研究出版社

社 址: 北京市西三环北路 19 号 (100089)

网 址: <http://www.fltrp.com>

印 刷: 北京市鑫霸印务有限公司

开 本: 787×1092 1/16

印 张: 22.75

版 次: 2009 年 4 月第 1 版 2009 年 4 月第 1 次印刷

书 号: ISBN 978-7-5600-8271-4

定 价: 48.00 元 (含 1 张 MP3 光盘)

* * *

如有印刷、装订质量问题出版社负责调换

制售盗版必究 举报查实奖励

版权保护办公室举报电话: (010)88817519

物料号: 182710001

前言

本教材是为大学日本语言文学专业本科高年级学生编写的。

二十世纪九十年代中期以后，高等学校外语教学改革的总趋势是从知识灌输式教学向能力培养式教学转换，由此也对教材编写提出了新要求。在这样的背景下，日本近现代文学教材的编写近年也开始了一些新的探索，但总体上看还没有完全摆脱旧模式，且所选篇目也多囿于“纯文学史观”。因此在本教材的编写中，编者根据多年的教学和研究经验，从提高文学修养和培养研究能力的教学理念出发，在篇目选择、体例编写以及栏目设置等方面作了新尝试。主要有以下特色：

1. 丰富性：所选篇目皆为名篇佳作，尽量照顾不同时期的各种流派，为打破“纯文学史观”，有意识地选入推理小说和村上春树小说等作品；此外，还选入被一般文学教材所忽视的近现代诗、俳句和短歌，因此在文类和体裁上可以称得上是一部丰富多彩的文学作品选读教材。

2. 欣赏性：每篇课文后除设有“词汇注释”、“作者年谱”和“作品解说”栏目帮助理解内容外，还配有MP3光盘让读者能够从声音、韵律的角度欣赏文学作品，改变迄今单一的默读欣赏方式。另外，还专门设置“短歌、俳句欣赏方法”栏目便于读者了解日本传统韵文的欣赏特点。书末附有《日本近现代文学简史》，勾勒了日本近现代文学演变的整体风貌，利于读者把握作品的文学背景。因此，本教材也适合用于非专业日语学习者提高阅读水平、了解日本近现代文学。

3. 学术性：每篇课文后设有“资料拔萃”和“参考文献”栏目，精选一些与作品相关的作者创作谈、草稿以及代表性的研究论著目录，以扩大视野和增加阅读趣味，提供思考和研究的线索。如果读者希望

进一步提高研究能力，则建议参考『吾輩は猫である』『羅生門』『文の多い料理店』『伊豆の踊り子』四篇课文后面的“先行研究”以及书末的附录《现代文艺批评理论简述》。通过“先行研究”可以了解到任何作品的解读都是多样化的，且随着时代的变迁而变化，本教材所编写的“作品解说”也只是导读，绝非标准答案。读者自己不妨大胆地尝试在此基础上提出自己的看法，或以“参考文献”为线索梳理其他作品的先行研究史。《现代文艺批评理论简述》介绍了一百多年来文学研究的主要思潮和流派，读者可以在读解的方法论上从中寻找有益的启示。总之，本教材萃集了丰富的学术信息，因此也可以作为硕士研究生“作品研究课”的教材使用。

本教材由十五课构成，篇目顺序基本上按照作品的发表年代排列，读者可以根据自己的水平和兴趣，从喜爱的作品开始阅读或听MP3光盘的朗读，没有必要从第一课按部就班地学习。对每一课后面设置的栏目以及书末的附录也可以根据自己的目的和能力，选择性地使用。因为，无论是这些篇目还是这些栏目，从本教材的编写旨意出发，都是为了让读者能够感性地、知性地享受阅读文学作品的快乐，而不是出于学习义务。文学修养是不可能从枯燥的学习义务中得到提高的，研究能力如果离开兴趣也无从谈起。希望读者能够从本教材中获取自己所需要的那一部分。

在编写过程中，北京日本学研究中心原主任、东京学艺大学的松冈荣志教授审读了本教材的部分内容，并与夫人松冈飞鸟女士一起朗读了部分课文；北京师范大学的王丽亚教授审读了《现代文艺批评理论简述》，他们都提出了宝贵意见，为本教材增色不少，在此一并表示衷心感谢。

由于编者水平有限，错漏在所难免，欢迎大家批评指正。

编者

2008年7月

目 录

第一課 吾輩は猫である	夏目漱石 1
一、作者年譜.....	16
二、作品解説.....	17
三、資料抜粹.....	18
四、先行研究.....	20
五、古典文法（1）——歴史仮名遣い.....	22
六、参考文献.....	23
第二課 刺青	谷崎潤一郎 25
一、作者年譜.....	35
二、作品解説.....	36
三、資料抜粹.....	37
四、参考文献.....	39
第三課 羅生門	芥川龍之介 41
一、作者年譜.....	49
二、作品解説.....	50
三、資料抜粹.....	52
四、先行研究.....	55
五、参考文献.....	56
第四課 城の崎にて	志賀直哉 59
一、作者年譜.....	66
二、作品解説.....	67
三、資料抜粹.....	69

	四、参考文献.....	75
	第五課 注文の多い料理店	宮沢賢治 77
	一、作者年譜.....	87
	二、作品解説.....	88
	三、資料抜粋.....	90
	四、先行研究.....	93
	五、参考文献.....	95
	第六課 伊豆の踊子	川端康成 97
	一、作者年譜.....	126
	二、作品解説.....	127
	三、資料抜粋.....	128
	四、先行研究.....	130
	五、参考文献.....	132
	第七課 セメント樽の中の手紙	葉山嘉樹 133
	一、作者年譜.....	138
	二、作品解説.....	139
	三、資料抜粋.....	140
	四、参考文献.....	142
	第八課 山月記	中島敦 143
	一、作者年譜.....	152
	二、作品解説.....	153
	三、資料抜粋.....	154
	四、参考文献.....	159
	第九課 桜の森の満開の下	坂口安吾 161
	一、作者年譜.....	186
	二、作品解説.....	187
	三、資料抜粋.....	188
	四、参考文献.....	191
	第十課 一年半待て	松本清張 193
	一、作者年譜.....	216

二、作品解説.....	217
三、資料抜粋.....	219
四、参考文献.....	221

第十一課 黙市 津島佑子 223

一、作者年譜.....	236
二、作品解説.....	238
三、資料抜粋.....	239
四、参考文献.....	241

第十二課 レーダーホーゼン 村上春樹 243

一、作者年譜.....	256
二、作品解説.....	257
三、資料抜粋.....	259
四、参考文献.....	264

第十三課 近現代詩 島崎藤村等 267

一、近現代詩年表.....	275
二、近現代詩解説.....	276
三、資料抜粋.....	277
四、古典文法（2）——動詞・形容詞・助動詞の活用表.....	279
五、参考文献.....	280

第十四課 近現代短歌 与謝野晶子等 283

一、近現代短歌年表.....	286
二、近現代短歌解説.....	287
三、短歌読解と鑑賞のポイント.....	288
四、資料抜粋.....	289
五、古典文法（3）——接続助詞・格助詞・係助詞.....	291
六、参考文献.....	292

第十五課 近現代俳句 正岡子規等 293

一、近現代俳句年表.....	296
二、近現代俳句解説.....	297
三、俳句読解と鑑賞のポイント.....	298

四、資料抜粹.....	300
五、参考文献.....	301

附录：

一、日本近现代文学简史	303
二、现代文艺批评理论简述	327

第一課

吾輩は猫である

なつめ そうせき
夏目漱石

わがはい
吾輩は猫である。名前はまだ無い。

どこで生まれたか頓と^{とん}見當がつかぬ。何でも薄暗いじめへ^{うすぐら}した所でニャーへ泣いて居た事丈は記憶して居る。吾輩はこゝで^{ことだけ}始めて人間といふ⁴ものを見た。然もあとで聞くとそれは書生といふ人間中^{にんげんちゆう}で一番^{だうあく}憐悪な種族であつたさうだ。此書生といふのは時々我々を捕へて^{つかま}煮て食ふといふ話である。然し其當時は何といふ考^{かんがへ}もなかつたから別段恐^{べつだんおそ}しいとも思はなかつた。但彼の掌^{たゞ}に載せられてスーと持ち上げられた時何だかフハへした感じが有つた許りである。掌の上で少し落ち付いて書生の顔を見たのが所謂人間といふもの^{いはゆる}見始^{みはじめ}であらう。此時妙なものだと思つた感じが今でも残つて居る。第一毛を以て裝飾されべき筈の顔がつるへして丸で薬罐だ。其後猫にも大分逢つたがこんな片輪には一度も出會はした事がない。加之^{そのご}顔の真中が餘りに突起して居る。そうして其穴の中から時々ぷうへ^{けわり}と烟を吹く。どうも咽せぼくて實に弱つた。是が人間の飲む烟草といふものである事は漸く此頃知つた。

此書生の掌の裏でしばらくはよい心持^{こころもち}に坐つて居つたが、暫くすると非常な速力^{そくりよく}で運轉^{うんでん}し始めた。書生が動くのか自分丈^{ただ}が動くのか分らないが無暗に眼が

1. 頓と：(副) 完全、一点儿也不(下接否定语)。一般写作“とんと”。
2. じめへ：じめじめ。历史假名用法，“へ”为重复合符号。历史假名用法规则请参考“古典文法(1)”。
3. こゝで：ここで。“ゝ”为平假名重复符号。
4. いふ：いう。“ふ”为历史假名用法，音为“う”。类似用法还有“思ふ”“考へる”等。
5. 加之：のみならず。旧汉字用法。

廻る。胸が悪くなる。到底助からないと思つて居ると、どさりと音がして眼から火が出た。夫迄は記憶して居るがあとは何の事やらいくら考へ出さうとしても分らない。

ふと気が付いて見ると書生は居ない。澤山居つた兄弟が一疋も見えぬ。肝心の母親さへ姿を隠して仕舞つた。其上今迄の所とは違つて無暗に明るい。眼を明いて居られぬ位だ。果てな何でも容子が可笑い¹と、のそへ這ひ出して見ると非常に痛い。吾輩は藁の上から急に笹原の中へ棄てられたのである。

2 漸くの思ひで笹原を這ひ出すと向ふに大きな池がある。吾輩は池の前に坐つてどうしたらよからうと考へて見た。別に是といふ分別も出ない。暫くして泣いたら書生が又迎に来てくれるかと考へ付いた。ニャー、ニャーと試みにやつて見たが誰も來ない。其内池の上をさらへと風が渡つて日が暮れかゝる。腹が非常に減つて來た。泣き度でも²聲が出ない。仕方がない、何でもよいから食物のある所迄あるかうと決心をしてそろりへと池を左りに廻り始めた。どうも非常に苦しい。そこを我慢して無理やりに這つて行くと漸くの事で何となく人間臭い所へ出た。此所へ這入つたら、どうにかなると思つて竹垣の崩れた穴から、とある邸内にもぐり込んだ。縁は不思議なもので、もし此竹垣が破れて居なかつたなら、吾輩は遂に路傍に餓死したかも知れんのである。一樹の蔭とはよく云つたものだ。此垣根の穴は今日に至る迄吾輩が隣家の三毛を訪問する時の通路になつて居る。借邸へは忍び込んだものゝ是から先どうして善いか分らない。其内に暗くなる、腹は減る、寒さは寒し、雨が降つて來るといふ始末でもう一刻も猶豫が出来なくなつた。仕方がないから兎に角明るくて暖かさうな方へ方へとあるいて行く。今から考へると其時は既に家の内に這入つて居つたのだ。こゝで吾輩は彼の書生以外の人間を再び見るべき機会に遭遇したのである。第一に逢つたのがおさん⁴である。是は前の書生より一層亂暴な方で吾輩を見るや否やいきな

1. 容子が可笑い：ようすがおかしい。旧漢字用法。

2. 泣き度でも：なきたくても。旧漢字用法。

3. 一樹の蔭：佛教語，互不相識の行路人偶然同在一樹下休息，都是前世的因緣。

4. おさん：“おさんどん”的略稱。女傭。

り頸筋をつかんで表へ抛り出した。いや是は駄目だと思つたから眼をねぶつて運を天に任せて居た。然しひもじいのと寒いのはどうしても我慢が出来ん。吾輩は再びおさんの隙を見て臺所へ這ひ上つた。すると間もなく又投げ出された。吾輩は投げ出されては這ひ上り、這ひ上つては投げ出され、何でも同じ事を四五遍繰り返したのを記憶して居る。其時におさんと云ふ者はつくべ¹いやになつた。此間おさんの三馬²を偷んで此返報をしてやつてから、やつと胸の痞が下りた³。吾輩が最後につまみ出され様としたときに、此家の主人が騒々しい何だといひながら出て来た。下女は吾輩をぶら下げて主人の方へ向けて此宿なしの小猫がいくら出しても出しても御臺所へ上つて来て困りますといふ。主人は鼻の下の黒い毛を撚りながら吾輩の顔を暫らく眺めて居つたが、やがてそんなら内へ置いてやれといつたまゝ奥へ這入つて仕舞つた。主人は餘り口を聞かぬ人と見えた。下女は口惜しさうに吾輩を臺所へ抛り出した。かくして吾輩は遂に此家を自分の住家と極める事にしたのである。

吾輩の主人は滅多に吾輩と顔を合せる事がない。職業は教師ださうだ。學校から歸ると終日書齋に這入つたぎり殆んど出て來る事がない。家のものは大變な勉強家だと思つて居る。當人も勉強家であるかの如く見せて居る。然し實際はうちのものがいふ様な勤勉家ではない。吾輩は時々忍び足に彼の書齋を覗いて見るが、彼はよく晝寐をして居る事がある。時々読みかけてある本の上に涎をたらして居る。彼は胃弱で皮膚の色が淡黄色を帯びて弾力のない不活潑な徴候をあらはして居る。其癖に大飯を食ふ。大飯を食つた後でタカヂヤスターゼ⁴を飲む。飲んだ後で書物をひろげる。二三ページ讀むと眠くなる。涎を本の上へ垂らす。是が彼の毎夜繰り返す日課である。吾輩は猫ながら時々考へる事がある。教師といふものは實に樂なものだ。人間と生れたら教師となるに限る。こんなに寝て居て勤まるものなら猫にでも出来ぬ事はないと。夫でも主人に云

1. つくべ：つくづく。“べ”為浊音重复符号

2. 三馬：“秋刀魚”（さんま）。旧漢字用法。

3. 胸の痞が下りた：心情舒暢了，解气了。

4. タカヂヤスターゼ：复方淀粉酶消化剂。現在一般写作“タカ・ジアスターゼ”。

はせると教師程つらいものはないさうで彼は友達が来る度に何とかゝんとか不平を鳴らして居る。

吾輩が此家へ住み込んだ當時は、主人以外のものには甚だ不人望であつた。どこへ行つても跳ね付けられて相手にしてくれ手がなかつた。如何に珍重されなかつたかは、今日に至る迄名前さへつけてくれないのでも分る。吾輩は仕方がないから、出来得る限り吾輩を入れてくれた主人の傍に居る事をつとめた。朝主人が新聞を読むときは必ず彼の膝の上に乗る。彼が晝寐をするときは必ず其脊中に乗る。是はあながち主人が好きといふ譯ではないが別に構ひ手がなかつたから已を得ん¹のである。其後色々経験の上、朝は飯櫃の上、夜は炬燵の上、天氣のよい晝は椽側へ寐る事とした。然し一番心持の好いのは夜に入つてこのうちの小供の寐床へもぐり込んで一所にねる事である。此小供といふのは五つと三つで夜になると二人が一つ床へ入つて一間へ寐る。吾輩はいつでも彼等の中間に己れを容るべき餘地を見出してどうにか、かうにか割り込むのであるが運悪く小供の一人が眼を醒ますが最後大變な事になる。小供は——殊に小さい方が質がわるい——猫が来たへといつて夜中でも何でも大きな聲で泣き出すのである。すると例の神經胃弱性の主人は必ず眼をさまして次の部屋から飛び出して来る。現に先達て杯は物指で尻ペたをひどく叩かれた。

吾輩は人間と同居して彼等を觀察すればする程、彼等は我儘なものだと斷言せざるを得ない様になつた。殊に吾輩が時々同衾する小供の如きに至つては言語同斷²である。自分の勝手な時は人を逆さにしたり、頭へ袋をかぶせたり、抛り出したり、へつつい³の中へ押し込んだりする。而も吾輩の方で少しでも手出しを仕様⁴ものなら家内總がゝりで追ひ廻して迫害を加へる。此間も一寸疊で爪を磨いだら細君が非常に怒つてそれから容易に座敷へ入れない。臺所の板の間で他が顛へて居ても一向平氣なものである。吾輩の尊敬する筋向の白君杯は

1. 已を得ん：やむをえぬ。“ん”是“ぬ”的变音。

2. 言語同斷：岂有此理，荒謬绝伦。

3. へつつい：灶，炉灶。

4. 仕様：しよう。旧汉字用法。

逢ふ度毎に人間程不人情なものはないと言つて居らるゝ。白君は先日玉の様な子猫を四足産まれたのである。所がその家の書生が三日目にそいつを裏の池へ持つて行つて四足ながら棄てゝ來たさうだ。白君は涙を流して其一部始終を話した上、どうしても我等猫族が親子の愛を完くして美しい家族的生活をするには人間と戦つて之を剿滅せねばならぬといはれた。一々尤の議論と思ふ。又隣りの三毛君杯は人間が所有權といふ事を解して居ないといつて大に憤慨して居る。元來我々同族間では目刺の頭でも鱈の臍でも一番先に見付たものが之を食ふ權利があるものとなつて居る。もし相手が此規約を守らなければ腕力に訴へて善い位のものだ。然るに彼等人間は毫も此觀念がないと見えて我等が見付た御馳走は必ず彼等の爲に掠奪せらるゝ¹のである。彼等は其強力を頼んで正當に吾人が食ひ得べきものを奪つて濟して居る。白君は軍人の家に居り三毛君は代言の主人を持つて居る。吾輩は教師の家に住んで居る丈、こんな事に關すると兩君よりも寧ろ樂天である。唯其日へが何うにか斯うにか送られゝばよい。いくら人間だつて、さういつ迄も榮へる事もあるまい。まあ氣を永く猫の時節を待つがよからう。

我儘で思ひ出したから一寸吾輩の家の主人が此我儘で失敗した話をし様。元來此主人は何といつて人に勝れて出来る事もないが、何にでもよく手を出したがる。俳句をやつてほとゝぎす²へ投書をしたり、新體詩を明星³へ出したり、間違ひだらけの英文をかいたり、時によると弓に凝つたり、謠を習つたり、又あるときはバイオリン杯をブーへ鳴らしたりするが、氣の毒な事には、どれもこれも物になつて居らん。其癖やり出すと胃弱の癖にいやに熱心だ。後架⁴の中で謠をうたつて、近所で後架先生と渾名をつけられて居るにも關せず一向平氣

1. せらるゝ：させられる。“文語サ変動詞”の连体形。相关语法参看“古典文法（3）”。

2. ほとゝぎす：俳句杂志，由正冈子规、高滨虚子从明治三十年开始创办，致力于俳句革新，提倡“写生文”。漱石曾在该杂志上发表俳句、文学评论和留英日记等。小说《我是猫》就是受主编高滨虚子之邀创作的，从明治38年至39年陆续发表于该杂志上。

3. 明星：明治三十年代著名诗歌杂志，高举唯美主义和艺术至上的旗帜，主张个性和感情的解放，形成高踏和浪漫主义诗歌的风格。

4. 後架：厕所，便所。

なもので、矢張り是は平の宗盛にて候¹を繰返して居る。みんながそら宗盛だと吹き出す位である。此主人がどういふ考になつたものか吾輩の住み込んでから一月許り後のある月の月給日に、大きな包みを提げてあはたゞしく歸つて來た。何を買つて來たのかと思ふと水彩繪具と毛筆とワットマンといふ紙²で今日から謠や俳句をやめて繪をかく決心と見えた。果して翌日から當分の間といふものは毎日々々書齋で晝寐もしないで繪許りかいて居る。然し其かき上げたものを見ると何をかいたものやら誰にも鑑定³がつかない。當人もあまり甘くないと思つたものか、ある日其友人で美學とかをやつて居る人が來た時に下の様な話をして居るのを聞いた。

「どうも甘くかけないものだね。人を見ると何でもない様だが自ら筆をとつて見ると今更の様に六づかしく³感ずる」是は主人の述懐⁴である。成程詐りのない處だ。彼の友は金縁の眼鏡越に主人の顔を見ながら、「さう初めから上手にはかけないさ、第一室内の想像許りで畫がかける譯のものではない。昔し以太利⁴の大家アンドレア、デル、サルト⁵が言つた事がある。畫をかくなら何でも自然其物を寫せ。天に星辰あり。地に露華あり。飛ぶに禽あり。走るに獸あり。池に金魚あり。枯木に寒鴉あり。自然は是一幅の大活畫なりと。どうだ君も晝らしい畫をかゝうと思ふならちと寫生をしたら」

「へえアンドレア、デル、サルトがそんな事をいつた事があるかい。ちつとも知らなかつた。成程こりや尤もだ。實に其通りだ」と主人は無暗に感心して居る。金縁の裏には嘲ける様な笑が見えた。

其翌日吾輩は例の如く椽側に出て心持善く晝寐をして居たら、主人が例になく書齋から出て來て吾輩の後ろで何かしきりにやつて居る。不圖眼が覺めて何をして居るかといふ分許り細目に眼をあけて見ると、彼は餘念もなくアンドレア、

1. 平の宗盛にて候：謡曲「熊野」中の唱詞。

2. ワットマンといふ紙：华特曼紙，一种英国特产的水彩绘画用纸。

3. 六づかしく：むづかしく。旧汉字和历史假名用法。

4. 以太利：意大利。旧汉字用法。

5. アンドレア、デル、サルト：安德利·德·萨托(1486-1531)文艺复兴时期意大利画家。代表作有壁画《玛利亚的诞生》、油画《圣母和暴风雨之神》等，素描作品结构和諧平穩，明暗层次鮮明，人物表情和性格特征描寫极为生动。

デル、サルトを極め込んで居る。吾輩は此有様を見て覺えず失笑するのを禁じ得なかつた。彼は彼の友に擲擧せられたる結果として先づ手初めに吾輩を寫生しつゝあるのである。吾輩は既に十分寐た。欠伸がしたくて堪らない。然し切角主人が熱心に筆を執つて居るのを動いては氣の毒だと思ふて、ちつと辛棒して居つた。彼は今吾輩の輪廓をかき上げて顔のあたりを色彩つて居る。吾輩は自白する。吾輩は猫として決して上乘の出来ではない。脊といひ毛並といひ顔の造作といひ敢て他の猫に勝るとは決して思つて居らん。然しいくら不器量の吾輩でも、今吾輩の主人に描き出されつゝある様な妙な姿とは、どうしても思はれない。第一色が違ふ。吾輩は波斯産の猫の如く黄を含める淡灰色に漆の如き斑入りの皮膚を有して居る。是丈は誰が見ても疑ふべからざる事實と思ふ。然るに今主人の彩色を見ると、黄でもなければ黒でもない、灰色でもなければ褐色でもない、去ればとて是等を交ぜた色でもない。只一種の色であるといふより外に評し方のない色である。其上不思議な事は眼がない。尤も是は寐て居る所を寫生したのだから無理もないが眼らしい所さへ見えないから盲猫だか寐て居る猫だか判然しないのである。吾輩は心中ひそかにいくらアンドレア、デル、サルトでも是では仕様がなと思つた。然し其熱心には感服せざるを得ない。可成なら動かずに居つてやり度と思つたが、先つきから小便が催ふして居る。身内の筋肉はむづへする。最早一分も猶豫が出来ぬ仕儀となつたから、不已得失敬して兩足を前へ存分^{ぜんぶん}のして、首を低く押し出してあーあと大なる欠伸をした。さてかうなつて見ると、もう大人しくして居ても仕方がない。どうせ主人の豫定は打ち壊はしたのだから、序に裏へ行つて用を足さうと思つてのそへ這ひ出した。すると主人は失望と怒りを掻き交ぜた様な聲をして、座敷の中から「此馬鹿野郎」と怒鳴つた。此主人は人を罵るときは必ず馬鹿野郎といふのが癖である。外に悪口の言ひ様を知らないのだから仕方がないが、今迄辛棒

1. 思ふて：思つて。历史假名用法。
2. 去ればとて：尽管如此。即“さればとて”。
3. 不已得：不得已。旧汉字用法，即“やむをえず”。

した人の氣も知らないで、無暗に馬鹿野郎呼はり^{よぼ}はりは失敬だと思ふ。それも平生^{へいぜい}吾輩が彼の脊中へ乗る時に少しは好い顔でもするなら此漫罵も甘んじて受けるが、こつちの便利になる事は何一つ快^{こころよ}くしてくれた事もないのに、小便に立つたのを馬鹿野郎とは酷い。元來人間といふものは自己の力量^{りきりやう}に慢じて皆んな^{まん}增長^{ぞうちやう}して居る。少し人間より強いものが出て來て窘めてやらなくては此先どこ迄增長するか分らない。

我儘も此位^{このくらゐ}なら我慢するが吾輩は人間の不徳について是よりも數倍^{かな}悲しむべき報道を耳にした事がある。

吾輩の家の裏に十坪許りの茶園がある。廣くはないが瀟洒とした心持ち好く日の當る所だ。うちの小供があまり騒いで樂々晝寐の出来ない時や、餘り^{たいくつ}退屈^{たいくつ}で腹加減のよくない折抔は、吾輩はいつでも此所へ出て浩然の氣を養ふのが例である。ある小春の穩かな日の二時頃であつたが、吾輩は晝飯後快よく一睡した後、運動かたへこの茶園へと歩を運ばした。茶の木の根を一本へ嗅ぎながら、西側の杉垣のそばまでくると、枯菊を押し倒して其上に大きな猫が前後不覺に寐て居る。彼は吾輩の近付くのも一向心付かざる如く、又心付くも無頓着なる如く、大きな躰をして長々と體を横へて眠って居る。他の庭内に忍び入りたるものが斯く迄平氣に睡られるものかと、吾輩は竊かに其大膽なる度胸に驚かざるを得なかつた。彼は純粹の黒猫である。僅かに午を過ぎたる太陽は、透明なる光線を彼の皮膚の上に抛げかけて、きらへする柔毛の間より眼に見えぬ炎でも燃え出づる³様に思はれた。彼は猫中の大王とも云ふべき程の偉大なる體格を有して居る。吾輩の倍は慥かにある。吾輩は嘆賞の念と、好奇の心に前後を忘れて彼の前に佇立して餘念もなく眺めて居ると、靜かなる小春の風が、杉垣の上から出たる³梧桐の枝を軽く誘つてばらへと二三枚の葉が枯菊の茂みに落ちた。大王はくわつと⁴其眞丸の眼を開いた。今でも記憶して居る。其眼は

1. 呼はり：(用不好的称号) 称呼。“呼ばわり”。
2. 燃え出づる：燃え出る。
3. 出たる：でた。
4. くわつと：勃然大怒。历史假名用法，同“かっど”。